

春名好重 解説

書 評

加賀前田家伝来古筆切手鑑『野辺のみどり』

萩 谷 朴

私は元来、書評を引き受けないことにしている。見え透いた提灯持ちは厭だし、著者の苦心を考えると、批判すべきことがあっても、著者以上に詳しく調べ深く考えた上でなければ、軽々に言を加うべきではないと思うからである。だから、これまでには、早大教授岩津資雄氏の『歌合せの歌論史研究』に関する書評一点だけで、他は一切御辞退申し上げた。ところが此の度、自ら禁を破って、再び書評の筆を執ったのにはやむを得ぬ事情があったからである。

第一に、手鑑『野辺のみどり』の所蔵者前田家尊経閣文庫には、なみなみならぬ学恩を蒙っていること、第二に『野辺のみどり』を作製せられたのが、恩師田中親美先生であること、第三に複製本の解説者春名好重教授は、私の最も畏敬する先輩であること、そしてこれら三つの恩誼が、私の東大国文学科一年生の時から、三十六年の長期に亘って続いているのであるから、到底辞退し切れるところではない。

学部一年生の身で、池田亀鑑助教授の『校異源氏物語』のお仕事に参加を許された時、春名氏は、グループのリーダーとして万事御指導を賜わった。又、戦前、前田育徳会が、伝来の重宝を毎年複製して無償配布していた頃、その『尊経閣叢刊』の解説委員であった池田先生は、春名氏に命じてその草稿を準備せしめられたが、私がお仕事を引き継いで、『元輔集』『齋宮女御集』『四条中納言集』等の解説を起草したのであるから、互いに因縁浅からぬもの

があるし、これらの複製は、主として田中親美先生の監修の下になされていたので、しばしば私共は渋谷へ参上して、親美先生のお教えを受けねばならなかったから、春名氏が書道史の権威として今日の地位を築かれたのも、実はここに淵源していたと云えよう。その上、戦後も、名筆鑑賞会や、毎月最終土曜日の親美先生膝下における研究会にも、春名氏からお誘いを受けて参加することとなったのであるから、春名氏は、まことに私にとって頭のあがらぬ難有い先輩であるといわねばならない。

さて、淡交社刊行の『野辺のみどり』は、近年頗る盛んとなった古美術の複製刊行物の中でも、極めて出色の逸品であることは、一見して疑う余地はあまりない。元本にある七宝角金具が、とてもこれだけのものを作る職人がなくて附けられなかったことはやむを得ないが、名物の『紹巴裂』をそのままに特織して用いたところは、元本の気品をうかがうに十分である。

収容するところの古筆切二十八葉、その中二十葉までが美しい王朝の装飾料紙であるから、いかに近代の印刷技術を駆使しても、到底その美を再現し得るところではない。しかるに、料紙の製作を担当した福田喜兵衛氏は、田中親美先生の女婿として、三十年の長きに亘り膝下の薫陶を受け、装飾料紙の技法を悉皆伝授せられた人であるから、まことに幸いなことであった。近頃でこそ凡百の人が古筆について語り、王朝の美を嘆々するが、明治十年代、欧化専一の

頃から八十余年の長きに亘って、古筆や繪巻物を主に、平安朝の美を発見し、復元し、啓蒙に努めて来られた田中親美先生は、知る人ぞ知る近世初頭の本阿弥光悦に、勝るとも劣らぬ偉大な存在なのである。

唐紙・蠟箋・飛雲・墨流し・截金・切箔・野毛・切り継ぎ・破り継ぎ・重ね継ぎ等、鎌倉期以後は断絶していた繊細華麗な王朝の裝飾技法を、羅文紙以外には悉く復活再現した上に、書芸画技の天分を駆使して、有名な『源氏物語絵巻』『寝覚物語絵巻』『紫式部日記絵巻』『元永本古今集』『西本願寺本三十六人集』『平家納経』『久能寺経』『慈光寺経』その他、莫大な国宝の、元本と微塵も違わぬ精巧な模本を作製された、いわば神技の人であるから、その直伝を受けた福田氏の仕事にソツのあろうはずがない。『野辺のみどり』の古筆切を、ここにさながら彷彿して鑑賞し得ることは、まことに難有いことである。木版と写真版と、そして丹念な手仕事とによって模製された料紙は、十分鑑賞に値するものである。

猶、無題簽の元本に比べて、却って複製本には、巻頭『寸松庵色紙』の第四句から取って、「のへのみとり」と仮名書きした題簽が押されているが、実は解説脱稿の後、福田氏の発案によって追加されたので、その点、解説には言及を洩らしたのであると、春名氏から説明を承わった。

ところでいよいよ春名氏の解説についての批評に進むのであるが、「褒め言葉は薩で他人に、叱言は面と向かって当人に」というのが私の信条であるから、書評というものは、褒貶いずれにせよ公刊されて、当人にも他人にも同時に吹聴することとなるので、私の信条とは全く合致しないわけである。故に書評執筆の儀は固辞して引き受けなかったのであるから、ここに来て、私の筆は一層渋滞せざるを得ない。

本解説について具体的に申せば、『野辺のみどり』という前田家重宝の手鑑を解説する前の手続きとして、藩祖利家以来、歴代藩主の古筆に対する深い理

解と愛情とを、歴史の流れと人物の点描とによって、興味深く読者に周知徹底せしめておこうとされる、春名氏の該博な知識と懇切な文章とによって、読者は、近世以降の古筆尊重の風潮と前田家の家風というものについての完全な予備知識を持った上で、手鑑『野辺のみどり』の鑑賞の座へ招じ入れられることとなるのである。こういう春名氏の手法は、二十八葉の古筆切個々の作品に対する解説においても同様である。

伝貫之筆とか伝行成筆などという筆跡の極めは、全く架構のものであることが多い。しかし、春名氏は一往その伝称の上に立って伝称筆者の歴史的地位を正確に説明する。貫之の文学者としての経歴や能書としての名声を如何に解説しても『寸松庵色紙』や『高野切』の揮毫書家とは何の関係もないのであるが、貫之の史的価値が如何に偉大に評価さるべきであるかということをはっきり認識すれば、そのような偉大な人物の名を伝称筆者として冠せられたこれらの古筆作品が、書道史上に占める大きな価値も、成程と納得させられるわけである。その上で春名氏は、当該古筆切の書誌的な説明にはいる。その名称・伝来・文献としての内容・形状・料紙・装釘、そしていよいよ、その古筆切に対しての書芸としての価値の判定、伝称筆者にかかわらぬその執筆年代の推定、これらが前にも申したように、春名氏自身及び、田中先生以下、私如きに到るまでの研究者諸家の各説の公平な判断と総合の上に立って、穩健中正に纏められて、今日における書道史上の最終評価として発表せられるのであるから、いわば大項目主義の古筆辞典を見るが如く周到便利なものとなっている。読者は安心して正しい理解に到達することができる。

しかし、穩健中正といっても、それは決して微温的な妥協を事としたものではない。例えば近年、古来云い伝え来ったところの粘葉装の冊子本を胡蝶装、胡蝶装の冊子本を列帖装・綴葉装などと云い換えることが普通に行なわれ、我々は常にその双方に言及して読者の誤解を防ぐのに、まことに煩瑣な思いをし

ているが、春名氏は頑として、古来の伝統的な術語を単独使用して憚らない一徹さをも示していられる。この点、読者の中には、近來の名称に慣れた若い人達が多いことであらうから、混同しないように老婆心までに申しそえておく。ただ、次に申し述べることは、決して春名氏の誤りを指摘するためではなく、公刊の性質上、あまり明確にいうことを憚られた傾きがあるので、春名氏御自身の了解を得て、解説に省かれたところを些か補っておくためである。

それは、近衛家の大手鑑が予樂院家熙自身の手によって作られ、前田家三代の主利常も自己の見識によって古筆切五百十五枚に及ぶ手鑑を作ったことをいうならば、当の『野辺のみどり』についても、その形態的説明の他に、是非、成立の事情や製作者についての説明が欲しかったということである。

これは春名氏御自身も十分御存じの事であるから、私はここで解説を補って代弁するに過ぎないが、昭和十二年『野辺のみどり』が製作されるにあたっては、当主利為侯及び育徳財國の理事諸氏が、一切を挙げて田中親美先生に委嘱せられたのである。従って、前田家伝來の数々の手鑑の中から、これら二十八点の逸品を選択してメクリ取ったことも、通常は歴代の宸翰に始まり、撰閑嫡流の家から、身分高下の順を逐って繙衣の徒に到る、手鑑編輯の常識をやぶり、身分の高下にかかわらず、書品と伝称筆者の年代の上下親疎を考慮した審美主義の観点から貼付の順序をきめるという新風を採用したことも、表紙に前田家伝來の紹巴裂を選んだことも、各丁の台紙を、貼付の古筆切の大きさ厚さに合わせて、枠押しをして凹面を作って嵌め込むように貼りつけ、手鑑の開閉によつて古筆切の紙面が摩滅することを予防するという新工夫を凝らしたことも、すべては田中親美先生のユニークな発想になったものなのである。

表紙見返の豪華な装飾料紙が、心魂こめた親美先生の作品であることは、誰しも想像がつこうが、実は、手鑑本体の台紙を貼り継ぐことも、台紙に古筆切を押すことも、表紙に紹巴裂を張ることも、このような表具経師の仕事一切を、

親美先生が他人手を煩わすことなく自身でなさったことなのである。

白菊の七宝焼角金具も親美先生のデザインであるが、その彫金や陶窯の技工は、曾て親美先生が『平家納経』を模写された時、その巻軸の覆輪や題簽、発装の金具などを、親美先生の指導を受けて製作した人たちの中の、何びとかが作ったものであるから、この彫金技工を除く一切は、田中親美先生の心と技とが凝って『野辺のみどり』一帖の手鑑を成したといつても過言ではないのである。

考えて見れば、この手鑑に極め札が添えられていないことも、手鑑の表紙に題簽のないことも、上代様の書にかけては、当代に比類のない能書でありながら、自己の書跡を衆目に曝すことを極端に忌避せられる親美先生が、固く揮毫を辞退せられた為に、敢えて親美先生に代つて筆を執ろうというほどの厚顔無恥な人はなかったし、前田家でも遠慮せられた結果であらうと推察せられる。尾上柴舟博士すらが、遠く座を退いて、わずかに内箱の銘を執筆するに留まり、手鑑の表紙自体に染筆することは憚られたわけである。因みに面取沃懸・黒塗金蒔絵の内箱は、漆工の優れた加賀藩のことであるから、国元の金沢で多分作られたのであらう、田中親美先生の関知せられるところではなかった。

以上、『野辺のみどり』の成立と田中親美先生の業績とについて、解説にふれることのなかったところを補って、甚だ蕪雑な書評を終るが、春名氏が解説十五頁において、前田家に現存する藤原兼実筆『仏舍利奉納願文』一卷を、迂闊に過去の所藏品の中に数えられたことは、尊経閣文庫の飯田瑞穂氏の御指摘によつて、早速重刷の普及版で訂正せられたが、初版本購読の各位のために、ここで、春名氏に代つて訂正の弁を申し添えておく。(大東文化大学教授)

(加賀前田家伝來古筆切手鑑『野辺のみどり』 A3判・覆製・解説共限定三百部・定価十五万円。解説に原色版二枚追加の普及版は定価八千円・淡文社刊)